２０１１年第１７回吃音ショートコース　　２０１１年１０月８日～１０日

当事者研究

今秋の吃音ショートコースの講師、北海道浦河の精神障害者のコミュニティー「べてるの家」の向谷地生良さんは、当事者研究について、このように書いています。

『当事者研究は、症状、服薬、生活上の課題、人間関係、仕事などのさまざまな苦労を自分が苦労の主人公 ── 当事者 ── となって自ら主体的に研究しようと取り組み、従来とは違った視点や切り口でアプローチしていくことによって、起きてくる困難を解消し、暮らしやすさを模索していこうというものです。具体的には、当事者自身が抱える気分の落ち込みや対人関係、仕事の苦労などに対して仲間、家族、専門家と連携しながら「研究」し、ユニークな理解や対処法のアイデアを編み出して現実の生活の中に活かしていこうとする活動を行っています。キーワードは、「研究しよう」「研究すればなんとかなる」です。研究の中では、誰もが「自分の苦労の主人公」になり、単なる「問題解決の方法」ではなく、問題と思われている事柄に向き合う「態度」「見方」「立つ位置」の見直しや見極めを基本としながら、問題が解決されないままでも「まあ、なんとかやっていけそうだ」という可能性の視野の幅の広がりを経験をしていきます』

ＮＰＯ法人大阪スタタリングプロジェクトの毎週金曜日のミーティング「大阪吃音教室」のプログラム「当事者研究」では、吃音にどう悩み、吃音にどう向き合い、どのように生きてきたかを参加者で整理し学んできました。

当事者研究は、「発達障害の当事者研究」（医学書院）が示唆するように、特別支援教育や臨床心理学の分野で、今後、臨床・研究の大きな流れになるだろうと思います。

自分自身が課題に取り組むためにも、子どもの教育・臨床に携わる人にとっても、「当事者研究」について学ぶ意味は、大きいと思います。ご一緒にいかがですか。

人間関係について、自分自身の今後の人生について、考えたい人、ぜひご参加下さい。

日時　２０１１年１０月８・９・１０日（土・日・祝）

場所　アクティプラザ琵琶　　〒520-1503　滋賀県高島市新旭町深溝（風車村北）

℡　0740-25-7111

主催　日本吃音臨床研究会

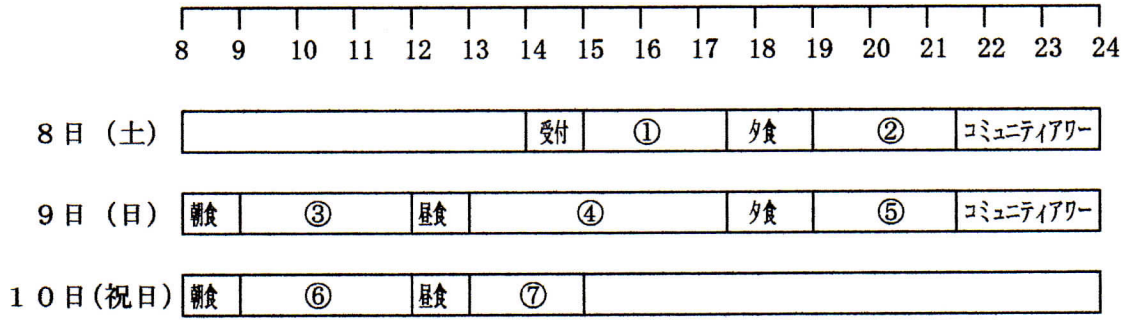
参加費　　一般参加者　３３，０００円　　日本吃音臨床研究会会員　３１，０００円

（研修費、２泊３日の宿泊・食事を含む全ての費用）

問い合わせ先　日本吃音臨床研究会

〒572-0850　寝屋川市打上高塚町1-2-1526　　TEL/FAX　　072-820-8244

プログラム



８日　（土）

① 出会いの広場・マイメッセージ

…新しく出会う人が互いに知り合い、リラックスできるように、からだを動かしたり、ゲームをしたりして、人間関係づくりのウォーミングアップ。その後、自分の思いや考えを伝えるマイメッセージ。

② プレ当事者研究

…翌日からの向谷地さんの当事者研究の前に、事前学習として、まずは私たちで、誰かの体験を当事者研究的に考えてみる。

コミュニティアワー（交流会）…　参加自由の交流会。

９日　（日）

③ 発表の広場

…どもる人本人は自分の体験を、どもる子どもの親は子どもとのかかわりでの体験を、ことばの教室担当者やスピーチセラピストの方は実践を、研究者の方は研究を、できれば、当事者研究の手法を用いて発表し、参加者全員で分かち合う。

④⑤講義と実習・体験学習

…当事者研究

講師：向谷地生良さん

コミュニティアワー（交流会）…　参加自由の交流会。

１０日　（祝）

⑥　対談

…向谷地生良さんと伊藤伸二が、前日のお話と実習をふまえて、当事者研究を、どもる子どもの指導やどもる人が自分らしく生きるために、またセルフヘルプグループなどの活動にどう生かすことができるかを対談する。フロアーからの意見も拾いながら、参加者全員で深める。

⑦　みんなで語ろうティーチイン

…参加者みんなで、吃音ショートコースを振り返る。

べてるの家が「当事者研究」で大切にしている理念

・自分の抱える苦労や対処を専門家に丸投げせず、自分自身が苦労の主役になる。
・主治医に与えられた病名ではなく、自分の苦労のパターンを見極めて「自己病名」を考える。
・弱い部分を否定せず、弱さには人と人をつなげ、謙虚にさせ、新しい可能性を生み出す力がある。
・どのような失敗や行き詰まりの経験の中にも未来につながる大切な「宝」が眠っている。
・抱えている問題を研究し、立ち位置を変えると、問題はあるけれど、あまり負担を感じなくなる。
・研究に必要な経験や生活情報を出し合い、眺め、見渡しながら議論し、その意味を考える。
・当事者の生活場面には多くの「考える」につながる苦労の「素材」が眠っている。
・「人」と「問題」を分ける。「問題の外に出る」「問題を外に出す」「問題を置き換える」
・当事者自身が見て聞いて感じている世界を尊重し、受け止めようとする姿勢を大切にする。
・苦労の内容をロールプレイや、物に置き換えたり、具体的に練習したりするなど、さまざまなツールを積極的に活用する。生活の場は試行錯誤を可能にする大切な「実験室」。
・悩んだとき、不安なとき、必要なとき、ちょっと立ち止まって研究してみる。
・「生きる勇気」につながる、「にもかかわらず、笑う」ユーモアと笑いが絶えない。
・困難を語る「言葉」を変え、「行い」を変えていく。「悩む」が「研究」に、「思い煩う」が「考える」に、「とらわれる」が「観察」に、「病気の失敗」が「有用な人生経験」に変わる。
・「病気が自分の生活をジャマしている」「病気さえなかったら」という生き方ではなく、自分が病気の足を引っ張らない生き方や暮らし方を見い出す。
・当事者研究は頭でしない、足でする。足を（身体）を使って具体的に行動し、人と出会い、困難な現実に立ちながら仲間と一緒に考えるプロセスを大切にする。

『レッツ！　当事者研究１』　ＮＰＯ法人地域精神保健福祉機構　より

◇◆◇　ゲストの紹介　◇◆◇

《講師》向谷地　生良（むかいやち　いくよし）

１９５５年、青森県生まれ。現在、北海道医療大学教授、社会福祉法人浦河べてるの家理事。ソーシャルワーカー。

べてるの家は、精神障がいをもつ当事者と地域の有志によって、１９８４年に、北海道の浦河に開設された生活と事業の拠点である。教会の古い会堂を借り受け住居として活用しはじめ、牧師夫人と五人のメンバーが日高昆布の袋詰めの下請けをはじめた。当初から、向谷地さんはソーシャルワーカーとしてかかわっている。その活動は多くのメディアで紹介されている。

＜主な著書＞

『べてるな人びと』（一麦出版社）『技法以前』『べてるの家の当事者研究』『べてるの家の「非」援助論』（医学書院）、『べてるの家から吹く風』（いのちのことば社）『安心して絶望できる人生（ＮＨＫ出版）『統合失調症を持つ人への援助論』（金剛出版）など多数。

◎参加申し込み方法

宿舎予約の関係で、９月３０日を申し込み締切とします。９月３０日までに、はがきかＦＡＸで請求いただければ、所定の申し込みはがきと参加費送金用の振替用紙をお送りします。ただし、定員になり次第締め切りますので、お早めにお申し込み下さい。

申し込みはがきと同時に、振替用紙でご送金下さい。なお、全日程参加を原則として参加費を設定していますが、部分参加の方は参加費を事務局までお問い合わせ下さい。

◎参加にあたって

できれば、でいいのですが、困っていることを自分なりに分析し、自分で自分を助けるにはどうしたらいいかを考えましょう。それを文章や図や表で表すことができればなおいいです。それらをもってきていただければ、当事者研究の材料になるでしょう。

なお、何の用意がなくても問題ありません。ただ、吃音ショートコースという場に参加するだけで、あなたの何かが変わるでしょう。安心してご参加下さい。

◎発表の広場での発表者募集

２日目の午前中は、毎年恒例の発表の広場です。成人のどもる人は自分の体験を、ことばの教室の担当者や臨床家の方は実践を、研究者の方は研究報告を、どもる子どもをもつ親の方は、子どもとのかかわりから得た体験を、発表して下さい。いろいろな人の人生にふれることのできるすばらしい時間になっています。

発表をご希望の方は、参加申し込みのときに、その旨お知らせ下さい。追って、発表の広場の要項をお送り致します。発表の概要を事前にお出しいただくことになっています。